

【一】次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

設問の都合上、本文を変更している部分があります。また、本文中の（一）の表現は、直前の語句の意味を表します。【二】の問題についても同様です。

さて礼儀ですが、礼儀はけして形式的なものではありません。形骸化して（内容のない、外形だけのものになっていて、あつてもなくてもよいものでもありません。むしろ内容あるメッセージなどよりも、よほど重要であるばかりでなく、ユウベンでもあると思います。）

なぜ、礼儀が大事なのか。挨拶が大事なのか。それは礼儀が、油断をしていないということの証しであるからです。人にたいして礼儀正しくふるまうということは、相手とどんな人間か解らない、何を考え、何をするつもりで、どんな地位、来歴をもっているか解らない、ということの表明であり、用心なのです。

よく、レストランのウェイターなどに、非常に横柄な態度をとったり、乱暴な口をきいたりする人がいますが、こういう人は、目下の人間にたいして威張るという点で、道徳的に必要な人間であると同時に、それ以上にきわめて、甘い、油断きわまる人だと思えます。

ウェイターだろうと、バーテンだろうと、その人がどんな人か解らない。どんな親兄弟をもっているかも、あるいは将来どんな人間になるかも解らないのです。そういう相手に油断してしまうということが、先々どんな災厄を招くか解らない。実際には、そのような可能性が低いとしても、そういう畏れを抱かない、想像しないということが、きわめて大きな欠落なのです。

日本人には、そういう油断が、きわめて広範に見られるように思われます。例えば、アメリカに行くと、もちろん地域にもよりますが、朝など歩いていると、通行する人が、みな「ハイ」とか、「モーニン」とか言つて、挨拶をしてくれます。

こういう事態をさして、よく、アメリカ人はフレンドリーである等と言いますが、たしかにそうであるけれども、またアメリカ独特の事情もあると思います。

アメリカというのは、申すまでもなく移民の国です。世界中から、いろいろな国民がやって来て暮らしている。国内でも始終移動をしているし、転職なんていうのは日常。サハンのわけです。職歴何年じやないとかレジット・カードがもてない、なんていう国とはまったく違うダイナミックな社会です。

そういう国では、当然のことながら、会う人間がどういふ人間か解らない。とんでもない悪人なのか、いい人なのか、解つたものではない。とすれば、とりあえず会った人に、「自分は悪人ではありませんよ、あなたに危害を加えたりしませんよ」ということを示すために、にこやかに「ハイ」などと言つて見せなければならな

覆っている、ということ。

接客マニアルは、礼儀の敵です。というと、驚かれるかもしれませんが。現在の若い人の、礼儀や対人関係のマナーの大部分が、こうしたマニアルや、その延長によって作られているのは事実です。

接客マニアルのなかでは、お客にたいする表情、言葉遣い、頭の下げ方、一々の注文に対する受け答えから、大きいトラブルにたいする対応に至るまでのすべてが網羅されています。もちろん働く場所や地位によって違ふものの、店の運営のすべてがこうしたマニアルによって規定されている。

ところが、こういうサービスマン形態が、全国、浦和に広がつてしまひ、一方において日常生活のなかから、儀礼的なことがほとんど消滅してしまつていくために、現在では、礼儀というものが、八十五円のハンバーガーを効率的に売るための手順と同一視されるようになってしまつたのです。

その点からすれば、私も、儀礼的なことを軽視して、ことさらに乱暴な言葉を使いたがる女子高生の気持ちも解らないではないのです。接客マニアルに比べれば、ならず者（乱暴・悪事を働く人）のような言葉遣いの方がマシだ、というのは、その通りでしょう。実際、今日の若い人たちの礼儀正しさ、というものに、ハンバーガー店の油臭さや消毒液の匂いを感じることもあるのは事実ですね。

なぜ、接客マニアル的な対応がよくないのか。

それは、けしてその内容や手順がよくない、ということではありません。マニアルの中味は、莫大な予算と、錯誤を経て作られたものなのではないでしょうか。それなりによく出来ていると思えます。

その点については、どうして、ファースト・フード店に入つたとたん、店員さんに微笑ましても嬉しくも何ともないのか。どちらかというとウンザリした気分になるのか、ということを考えてみれば、よく解るのではないのでしょうか。いや、とても嬉しい、快適だ、とおっしゃる方は、そもそも礼儀について考える資格が疑わしい、少し、そういう風潮に侵されすぎていると思えます。

※

なぜ、嬉しくないのか。それは、彼女なり、彼なりが、けして私に、あるいはあなたに微笑んでいるのではないからですね。別に私に会つて嬉しいから、微笑んでいるわけではない。ただ、笑ふことになつてから、笑つていただけなのです。

接客マニアルで決められているから、笑つてゐる。それが気味悪い。微笑みとか、笑い、というのは、自発的なものです。もしくは自発的に見せなければならぬのです。会話している相手から自然に笑みがこぼれたり、笑いが発したりすると、話をしている、なんとなく嬉しくなる、非常にリラックスした気分になつて、解放された心持ちになるのです。

いのです。

ところが日本は同質社会で、定住が基本になつてゐるので、大概の人は悪人ではない、その料簡（考え）は知れてゐる、自分の想像の範囲外の人間などゐるわけがない、という。ゼンティで暮らしてゐるので、別にむつつりした顔で歩いていても構わない。

これは、店などでも同じことですね。アメリカとかヨーロッパでは、お店に入る時に必ず、「ボンジュール」などと挨拶をしながら入ります。ところが、日本人は、店に入る時に、一々挨拶したりする習慣がない。そのために、日本人は、無作法だといつて嫌われたりするわけですが、しかしこれも別にエチケットのいい悪いなどではないのです。やはり、これらの国では、店に入るということは、Xを要することであり、それなりに愛想をよくして、自分が変な人間ではない、危険でもないければ、敵意もないことを示さなければならぬのです。

ところが、日本人の場合は、無言で、何の愛想もなく、ずかずかと店に入つて来る。そこには他人の家を訪れるのだというようなX感（感）はまったくない。好きに入つて出るのが、当然の権利であると思ひ込み、疑いのない油断がうかがわれます。こうした油断を、私たちはむしろ好ましいもの、気の置けないものと考えてゐるのです。でも、どうでしょうか。この油断は、たしかに気持ちのいい、リラックス出来るものかもしれませんが、その陰でまた、多くの大切なものを見逃している、あるいは取り逃がしてしまつてゐるのです。

礼儀を尊重しない人、礼儀の意義に無自覚な人というのは、無意識のうちに、他人や世間をたいして、馴れ合い、油断してしまつてゐるのです。それだけでなく、自分が、自らの意志で、しっかりと他者と社会をみつめ、緊張感と強い意志のもとで生きていくという覚悟を失つてゐる。ですから礼儀というのは、自動的なものであつてはならないのです。自動的、というより反射的なものであつてはならない。

何の考えもなしに、こういう場合はこのように挨拶する、という手順を反復しているのあれば、それは礼儀でも何でもありません。表面上は、礼儀正しいようには見えても、生きていることの緊張感の表現としての礼儀ではないわけです。むしろ正反對のものです。

そして、礼儀について難しいのは、この点なのです。現代には、生きた、才気煥発な（頭脳の働きが鋭く、それがはっきり表に現れてゐる）礼儀を發揮するというのがなかなか難しい時代的な困難があるのです。

時代的という大仰ですが、現代独特の難しさは、礼儀に關してあるといふことです。その困難というのは、世間に、疑似礼儀のようなものが蔓延してゐる（かゝつてゐる）こと、つまりはいわゆる接客マニアル（手引き）のようなものが、対人関係を

そういう魅力が、機械的な笑ひには一切ない。むしろ笑ひという人間にとつてかなり自然な現象を、無理やり作り出してしまつてゐるという感じが、無残であると同時に侮辱を受けてゐるような気分になされるのです。

しかも、マニアル的な作法というものは、本来の文脈と離れて用いらがちです。それは礼儀が生きてゐるべき、本来の人と人との関係を離れて、ただ反射的動作としてやつてゐる、そうやつていけば問題は無い、行儀よく見える、というような発想から考えられ、とりいれられてしまつてゐるからです。

そのところをさらに深く探つてみると、現在における、人間関係の希薄化といふか、一面化といふ事態につきあたるのではないのでしょうか。

他人と対面してゐても、そこで関心を集めてゐるのは、自分。自分にたいする見方だけなのです。相手が自分をどう見てゐるかということばかり関心がいつていて自分がある程度評価してくれる人間とは、気楽につきあえるけれど、そこが不安だともきけない。こうした対面的な場における過度の防衛的な姿勢を、一面化と言つたのです。

そう言つて極端かもしれませんが、相手が一体どんな人間なんだろう、何を考へてゐるんだろう、見かけや言うことと、中味はどうズレてゐるんだろう、といったことにはあまり強い興味をもつてゐないように思ふのです。

そういったことへの興味が欠けてゐる、つまりは他者にたいする好奇心と、深いコミュニケーションへの欲求がない。ということとは、これはなかなか大きな現代的な問題——特に、携帯電話やEメールといった情報機器の「フキユウ」と切り離せない問題だと思ひますが——につながるわけですが、さしあたってその被害というか影響を一番強く受けてゐるのが、礼儀作法であると思ひます。

挨拶をすること、姿勢を正し、相手を眺め、困つていれば手を貸したり、道をあげたりする必要がないかを見届け、適当な話題を選んで話しながら、微笑みなり、真剣な顔をするなり、心配そうな顔をする。こうした行為は、どれ一つとして反射的に出来るものではないのです。きわめて深く複雑な判断、自分と相手との関係にたち、同時に自分が相手に何を求めるのか——好意か、善意か、敬意か、刺激的興味や誘惑的興味か——という計算から行われるべきものなのです。

（福田和也著「悪の対話術」より）

問1 太線部a-dのカタカナを漢字に直しなさい。

問2 太線部ア・イの漢字の読みを答えなさい。

問3 傍線部①「無残」・②「さしあたって」の意味をそれぞれ次から選び、記号で答えなさい。

- ①「無残」
 ア むなしなこと
 ウ いたましいこと
 エ おしつけがましいこと
 オ さしあたって
- ②「さしあたって」
 ア 当然
 ウ 以前から
 エ 今のところ
 オ とりわけ

問4 傍線部1は「守りが弱い」という意味の慣用句です。空欄に入る体の一部分の名前をひらがな二字で答えなさい。

問5 傍線部2「日本人には、そういう油断が、きわめて広範に見られるように思われます」について、次の各問いに答えなさい。

- ① 傍線部中の「そういう油断」とはどのようなことですか。本文中の語を使って簡潔に答えなさい。
 ② 「そういう油断が、きわめて広範に見られる」理由を述べている一文を傍線部以降の本文中から抜き出し、始めと終わりの五字を答えなさい。(句読点は一字と数えます。以下の問いも同様です)

問6 傍線部3「無作法」の語の成り立ちは、「作法」という熟語の上に打ち消しを表す「無」がついたものです。同様に「無」をつけて三字の熟語が成り立つ語を次からすべて選び、記号で答えなさい。

- ア 日常 イ 用意 ウ 遠慮 エ 透明 オ 常識 カ 秩序

問7 傍線部4「しかしこれも別にエチケットのいい悪いなどではないのです」とありますが、これはどういうことですか。次から最も適切なものを選び、記号で答えなさい。

- ア アメリカやヨーロッパや日本は国によって事情が違うので、エチケットの問題を一律には論じられないということ。
 イ 日本人はエチケットの問題にあまり深く関心がない国民性を有するので、アメリカやヨーロッパとの比較は無意味なこと。
 ウ 世界中の人々が集まるアメリカやヨーロッパでは、エチケットの基準を決めたとしてもおそく定着しないだろうということ。
 エ アメリカやヨーロッパや日本はそれぞれ独自の文化があるので、それによってエチケットの善悪を判断するのだということ。

② 次の文章は、三浦しをん著「風が強く吹いている」の一節で、本文中の走・清瀬・王子・大家は同じ大学の陸上部員です。本文を読み、後の問いに答えなさい。

雪だ。視界を乱舞する。ハイスのような細かい欠片に気づき、走はほんやりと思つた。さつきまでは霧雨だったのに、いつのまに雪に変わったんだらう。どうりで寒いはずだ。

箱根では雪だったとはいえ、戸塚を過ぎた平野部のこのあたりで、また降りはじめると予想していなかった。走は長袖やアームウォーマーを着用していない。もつと温かい恰好がすばよかったな、とちらりと考えたが、すぐに忘れた。正面から受ける寒風を跳ね返すほど、体内が燃焼しはじめたからだ。

七秒差で先行していた帝東大の選手のこと、戸塚中継所を出て四百メートルも走らないうちに抜いた。いま、十三番目。東体大とのタイム差や実質的な順位を、思いわずらったところで情報はない。ただ走るだけ。一秒でも早く鶴見中継所に行く。それだけだ。

走はゆるやかな下り坂に乗り、最初の一キロを疾走した。腕時計でラップをたしかめる必要は感じなかった。たしかめずとも、自分がこれまでになく走れていることがわかる。関節の可動はなめらかだ。血流は滞りなく全身に酸素を行き渡らせる。それほど力をこめていとも思えないのに、脚は次々に地を蹴って、足裏と接する路面の感触を伝える。

調子はすこぶるいい。だが走の心は屈んでいた。未来を映す魔法の水盤みたいな、波ひとつ立たず静謐な中で落ちていくことに澄み渡っている。どうしたんだらう。もしかして俺は、闘志を失ってしまったんじゃないか。走は「I」不安になった。リズムに乗っていると感じるのは錯覚で、本当はとんでもなく遅いペースで走っているんじゃないか。

はじめて腕時計を見る。二キロを五分三十秒。II「悪くない。だけれどもしかしたら、時計が壊れているのかもしれない。そうだったら、どうしよう。」

動揺したせいで、少し呼吸が乱れる。その途端、沿道からの声援が耳に押し寄せた。ガードレールに沿って、はるか彼方までひとの壁が延々と、ギズかれていく。見物渋滞した対向車線の、車列のなかからも走に視線が注がれている。わざわざ車の窓を開け、声をかけてくれるひといた。

問8 空欄部X(二か所あります)に入る適切な語を本文中から抜き出し、答えなさい。

問9 次は、傍線部5「疑似礼儀のようなものが蔓延している」理由を説明した文です。空欄に入る適切な表現を※段落から抜き出し、答えなさい。

疑似礼儀のようなものが蔓延しているのは、人々に があるからだ。

問10 傍線部6・8は四字熟語です。空欄部にそれぞれ漢字二字を入れ、熟語を完成させなさい。

問11 次は、傍線部7「儀礼的な」の内容を説明した文です。空欄I、IIに入る適切な語句を答えなさい。ただし、Iは後の選択肢から選び、記号で答え、II・IIIは本文中から指定の字数で抜き出し、答えなさい。

「ことさらに乱暴な言葉を使いたがる女子高生の気持ちも解らないではない」と筆者がいうのは、現代の礼儀がIにすぎないものとなっているからである。女子高生の言葉遣いは乱暴なものであるとはいえず、相手へのII(二)があるという点においてはIとしての丁寧な言葉遣いよりもIII(十)が成立しているのではないかと筆者は考えている。

- 〔空欄Iの選択肢〕
 ア 機能的な対応
 ウ 一時的な反応
 イ 受動的な態度
 エ 表面的な形態

問12 傍線部9「そういう風潮」とは、どのような考え方ですか。次の形式に添って、二十字以内で答えなさい。

と考える

問13 本文には筆者の「礼儀」についての考えが述べられています。筆者は真の「礼儀」とはどのようなものだと考えていますか。現代社会の問題点に触れながら、わかりやすく説明しなさい。

斜め前方から、中継バイクのカタラを向けられていることに気づく。俺を映すことは、いいペースで走れているんだ。III「確信が持てた走は、再び安定を取り戻した。」

三キロ地点手前で、最初のアップダウンがある。分岐した道がゆるやかなアーチを描いて山側を通り、また本線に合流する。走の体は短い上り坂にも自然に対応した。走るリズムだけが、走のすべてを支配し、動かす。

周囲の景色と喧騒(さわがしいこと)が、また徐々に意識から離脱していく。目に入る景色を、景色としてうまく認識できない。ピントの合いたった写真としか思えないほど平板だ。屋内プールにいたみたいに、音が遠くで反響する。熱を、ヤドした皮膚は、なにかに包まれているかのようだ。舞う雪が触れても、夢のなかに似てまるで温度を感じない。

純度の高い集中が、走の心身に不思議な平穏と無感覚をもたらしつつあった。だが走は、そのことをまだ自覚できていなかった。

走の状態にいちいち気づいたのは、もちろん清瀬だ。清瀬は王子とともに、鶴見中継所で携帯電話の液晶画面に見入っていた。

中継バイクから送られた映像は、やや乱れながらも走の力走を伝える。ぶれも歪みもない、完璧なフォーム。そこから繰りだされる強さと速さが、「走りとはこういうものだ」と見るものに告げている。

「うつくしいな」

と清瀬はつぶやいた。魔物に魅入られたように陶然と(うっとり)とする清瀬の横顔に、王子はちらりと視線を向ける。

「こんな走りを見せられたら、いやになりますよ」

王子は、やるせなく笑った。「なんだかむなし」

その気持ちは、清瀬にもよくわかった。完全なる美と力をまえにして、できることは無に等しい。それを思い知らされるのはつらい。つらいけれど、見つめ、求めずにはいられない。むなしと言いつつ表すほかにない葛藤(対立。あらそい)が、たしかに心に生じる。

「努力ですべてがなんとかなると思うのは、傲慢(ごうまん)だ」ということだな」王子をなだめ、励ますように清瀬は言った。自分自身に言いかけせる言葉でもあった。

「陸上はそれほど甘くない。だが、目指すべき場所はひとつじゃないさ」
物理的に同じ道を走っても、たどりつく場所はそれぞれが違う。どこかにある自分のためのゴール地点を、探して走る。考え、迷い、まちがえてはやり直す。

もしも答えが、到達するところが、ひとつだったなら。長距離に、これほどまで魅惑されはしなかっただろう。走の走りを見てむなしさと感じ、それでもまだ走りたいと願うことなど、到底できないだろう。

完璧な走りを体現する走も。それを見て静かな喜びと闘志を醸し出す清瀬も。二人のレベルにはとても追いつけずとも、最後まで走り通した王子も。長距離の世界において、だれもが等価で、平等な地平に立っている。

「そうですね」

と、王子はうなずいた。あきらめに似た充足感が、王子の胸に生じる。しばらく黙って、清瀬と王子は画面のなかの走を見ていた。しんみりした雰囲気を持ち壊すタイミングで、清瀬の携帯に大家からの着信があった。

「ハイジ（清瀬の名前）、ハイジ、どうして連絡してこない？」

大家はあせっているようだ。「もうすぐ五キロ地点だぞ。走になんと指示を出せばいい？」

「なにも。声をかけないでください。」

しかし走は、沿道の声援にもまるで反応を示さないんだ。レースのプレッシャーに吞まれて、はんやりしているように見える

「IV」

清瀬は確信をもって答えた。「走はいま、極度に走りに集中しているんです。それを妨けてはいけません」

修行を積んだ僧が、座禅を組んで悟りをひらくように。単調なリズムで大地を踏んで、シャーマン（まじ）がトランス状態（意識が通常とは異なった状態）になるように。走は、「走る」という慣れた行為を通して、次元のちがう境地へ至ろうとしている。

たるみなく張った細い糸を、切れる寸前までなお引き絞ろうとしているのがわかる。緊張と、高揚が緑までみなぎった器に、あと、イッテキのなにかを投じよう。走は無心にひた走っている。

邪魔をしてはならない。だれも走に触れてはならない。いまは。

問1 太線部 a d のカタカナを漢字に直しなさい。

問2 太線部 ア・イの漢字の読みを答えなさい。

問3 傍線部1「下り坂に乗じて」の表現の意味を次から選び、記号で答えなさい。

- ア 下り坂に苦勞して
- イ 下り坂に關係なく
- ウ 下り坂に負けず
- エ 下り坂をうまく利用して

問4 傍線部2「未来を映す魔法の水盤に澄み渡っている」とありますが、これは、どういうことですか。最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア 安定した走りができている自分には何かが起こるような予感が、静かに広がっているということ。
- イ 求めている理想の走りが自分の心からすつと遠のいていくように感じているということ。
- ウ 勝利への執着をあらわすかのような自分の走りを、澄んだ心で感じているということ。
- エ 自分の走りの結果がまるでわかっているかのように心がおだやかであるということ。

問5 空欄Ⅰ・Ⅲに入る適切な語を次からそれぞれ選び、記号で答えなさい。ただし、同じ記号は一度しか使えません。

- ア やがて イ やはり ウ さらに
- エ ふいに オ ようやく

問11 傍線部8「あきらめに似た充足感が、王子の胸に生じる」とありますが、この時の王子の気持ちの説明したものとして最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア それぞれの到達点に向かつて走るといふ意志においては、自分は誰にも遅れをとっているわけではないと感じている。
- イ 自分にとっては最高の走りができたとあり返り、このことはきつとこれからの生きる支えになるだろうと感じている。
- ウ 自分にとって走ることが迷いながら歩んでゆく人生と同じだという発見に、ときめきを感じている。
- エ 走り終えたものだけが味わう喜びも、時がたてば色あせてしまうだろうと感じている。

問12 空欄Ⅳに入る言葉として最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア ええ、でも信じましょう。
- イ えつ、そう見えますか。
- ウ いいえ、逆ですよ。
- エ そう、当然です。

問6 傍線部3「周囲の景色と喧騒が、また徐々に意識から離脱していく」とありますが、この表現は、この後の走の変化を予想させるものです。どのようなことを予想させていますか。解答欄の「こと」につながるように本文中から三十五字以内で抜き出し、答えなさい。

問7 傍線部4「やるせなく」の語の使い方として適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア 私は思い切りやるせない笑顔で父を見送った。
- イ 妹はふつとやるせない表情で猫を抱きしめた。
- ウ 彼はやるせない行動の友を頼りにしていた。
- エ 友は言うまでもなくやるせない自信を持っていた。

問8 傍線部5「努力ですべてがなんとかなると思うのは、傲慢だ」とありますが、清瀬はなぜこのように思ったのですか。その理由をわかりやすく説明しなさい。

問9 傍線部6「もしも答えが、到達するところが、ひとつだったなら」とありますが、その「ひとつ」の答えとはどのようなものですか、簡潔に答えなさい。

問10 傍線部7「長距離の世界において、だれもが等価で、平等な地平に立っている」とはどういうことですか。最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア 走者にとっては、走る行為そのものに何よりも意味があるということ。
- イ 走者に実力差はあるが、スポーツの世界ではそれが当たり前だということ。
- ウ 走りたいという思いは、それぞれがいくつ共通の動機であるということ。
- エ 走ることの意味を各自が求めるという点では、皆同じ立場であるということ。